

# 「語りたい」と「語らない」

小倉祇園太鼓における生活史からみた都市の民俗をめぐるダイナミズム

Implication of Narration:  
Dynamism on Creative Process of Urban Folklore as Seen in Life Histories

中野紀和

はじめに

- ①他者に向けた語り(1)
- ②他者に向けた語り(2)
- ③自分に向けた語り
- ④語りをめぐるダイナミズム

結び

## 【論文要旨】

本稿は、生活史を用いて、話者と聞き手の関係性を視野に入れつつ、話者の自己肯定の過程から、都市社会のダイナミズムを明らかにする。また、従来の民俗学において、積極的に生かされてこなかった生活史の有効性を提示しようとするものである。

筆者のこれまでの小倉祇園太鼓を中心とした研究において、キーパーソンとなった3人の人物の生活史を取り上げる。話者のうち2人は、他者との差異を強調しそれを正統化することで人生を肯定していく。そこでは、反権威的立場とそれを権威によって正統化しようとする表裏一体の動きが繰り返される。

さらに、彼らの論理的・一貫性を支える、軸となる存在を見出した。架空の人物、無法松である。時代に規定された視線が無法松のイメージを創りあげる過程と、その実体のないイメージを話者が取り込み、差異化を促す過程は同じであり、イメージ、つまり中心軸は、たとえていうなら空洞の「竜巻の中心」である。それこそが、都市社会の民俗のありようを示すものである。彼らの語りは、非正統性、非中心性の裏返しでもあるが、対照的なもう1人の話者と対比することで、周縁性と中心性の揺れ動く動態も明らかにした。

キーワード：生活史、都市の民俗、正統性、差異化、周縁性